

幼年期の言語



ジョーゼフ・チャーチ

(ニューヨーク、ポーキープシ어의
ヴァッサーカレッジ、児童学科教授)

子どもはどのようにして言語を学ぶか。

言語学習とは何か。

言語学習はどのような影響をもつか。

子どもの言語を研究するには、言語学、哲学、社会学、人類学、発生学、動物の行動と発達、精神病学、および、知覚、思考、学習、人格形式の心理学など多くの分野が関係するので、それは研究の困難な分野と考えられている。そこでここに掲げた題目で論ずるのに、私は次の三つの問題にしばらくいたいと思う。

- (1) 子どもはどのようにして言語を学ぶか。
- (2) 子どもが言語を学ぶときに、彼が学んでいるということは、どういふことであるか。

(3) 言語を学ぶことによつて、子どもにはどのような相違がで
きるか。

言語を学ぶこと

言語の学習には、二つの明瞭な段階がある。第一は「受動的」な時期であり、この期間に、子どもは自分にいわれたことの多くを理解できるようになる。しかし、まだ、自分自身で言語を用いることはできない。第二の段階は「能動的」な段階で、子どもは実際に話すことができるようになる。言語理解の学習は、連合条件づけの過程として、容易に説明できる。すなわち、単語と物とが時間的に同時に与えられ、単語(あるいは語の集まり)が、物を代表する記号となる。それに対して、話すことは、容易に説明

できない。もちろん、子どもが話すことばは、彼が聞いていることばの模倣であることを私どもは知っている。

しかしながら、話すことを、単純な模倣理論で説明するのは、いくつかの難点がある。第一には、われわれの知識は、まだ模倣過程を十分に説明することはできないし、外的刺激がどのようにして刺激を産出する神経筋肉的過程に変換されるのかについてわかっていない。第二に、乳児の模倣は選択的である。すなわち、明らかに乳児にとって有意義なもののみが模倣されている。第三に、刺激が与えられて、過ぎ去ってしまったから、数時間あるいは数週間を経て、はじめて模倣が生じる場合がある。

さらにまた、模倣理論では、子どもが、代名詞を正しく用いるような、自分の見方に合わせて使用法を考えるようなことばの発達を説明することができない。また、複数形や、時間形、正しい語順や、誤まって用いられた文法や、自分で発見した語尾変化などのような話ことばの構造の一般原理をどのようにして学ぶかというようなことは、模倣理論では説明できない。最後に、すべての正常児が、自分自身で無数の組み合わせをこしらえて、——かならずしも創造的とはいわないまでも——一度も耳にしたことのないことをいうことができるのは、どうしてであるかというようなことも、模倣理論では説明されないのである。

もしも、子どもがいろいろの語や音をしゃべり、なかには適切なものも、不適切なものもあって、多くの誤まりをし、それに対

して、周囲の人が正しいものを強化し、正しくないものを消去するようにしているならば、心理学者が理論的に説明することは、もつと容易であろう。しかし、困難な事実は、幼児はひとたび喃語表現の段階を通りすぎると（この段階をとりこえる子どももある）表現はいちじるしくむだがなくなり、正確になり、ときどき誤りを犯すときも、ほとんどの場合、自分の論理をもっているということである。たとえば、ある三歳児の、政治家の父親が選挙でやぶれたといったとき「お父さん、心配することはないよ。また貼りつければいいよ」といった。明らかに、子どもは言語を機械的に学んでいるのではなく、知的に学んでいる。彼らは、おもてむきのことば以上のものを学んでいる。

それでは、ことばの学習とは何であろうか。

ことばの学習とは何か

言語の学習について教科書をよむと、語彙が言語のすべてであるかのようにみえる。もの名前を学ぶことは、幼児初期の子どもの最初の言語学習には重要な部分であることは事実であるが、それは決してすべてではない。

子どもは文法や文章構成の「一般規則」を自分でとりあげ、これを応用しはじめることについてすでに述べた。そして、話ことばの構造を学ぶにあたっては、子どもはこのような規則は少しも意識されないし、まわりのおとなもこのような規則については無

頓着であることは興味深いことである。加うるに、子どもは何ら教えられないでも、驚くほど多くの種類の、超言語的な「操作」

(そのあるものは、前言語段階の類同語をもっている)を学んでいる。たとえば、数えたり、たし合わせたり、評価したり、比べたり、抗弁したり、自慢したり、リズムをとったり、韻をふんだり、からかったり、冗談をいったり、何でもないおかしなことをいったり、想像の中で話をしたり、仮想したり、ことばの定義をしたり、推論したり、類似語をみつけたり、叙述をしたり、お話をつくったりなど。これらのうちのあるものは、子どもが出合った手本にもとづいて学んだものであるが、あるものは、学習の副産物あるいは自然的産物として生じたものである。

いま道具としての言語の学習について述べたのであるが、言語はまた内容をもっている。よちよち歩きの子どもは、他の人が話すのをきくことにより言語を学び、その言語によって、彼が住んでいる周囲の世界を学んでいる。周囲の人が子どもに語りかけることによって——質問の形で、あるいは、命令、冗談、叱責、話、警告、説明などの形で——明瞭にあるいは暗黙のうちに、その物や物の性質が示され、また、空間時間関係、原因結果、分量の大きさ、有意義か無意義か、価値、善悪、可能不可能などが示される。おとなや年長の子どもは、言語操作の手本と、現実の世界の解釈を子どもに提供している。また同時に、子どもの自分自身の同一性の感じと自信をもたせることができるかどうか、子

どもとおとなの言語的な関係の中できめられる。

一般的にいうならば、子どもは、——周囲の人びとの思考のしかた、人びとの語ることの内容や感情、子どもがいたり、したりすることに對する人びとの反応のしかたなどによって——文化的環境を学んでいく。そしてそれが子どもの態度を形成し、認知したり、感じたり、思考し、学習する能力を作っていくのである。

二つのことをここでとくに記しておかねばならない。子どもは文化なくしては、真の人間として成長することはできない——すなわち、子どもは、いかにして人間となるかを学ばねばならない。しかし、ある文化は、自由、獨創性、創造性を促進させ、限られた能力をも、文化の革新に役立てるようにはたらく。そしてまた、ある文化は、人間性を窒息させ、人間の精神を歪め、鈍らせ、現実を隠し、偽わるのである。

言語学習の影響

言語を学ぶということは、言語による学習を可能にするものであることについてすでに述べた。また、人びとが子どもに話をすることに對して世界がひらけるのみならず、子どもは自分の経験を整理し、自分自身を教えることが可能になる。そこで、われわれは言語とはコミュニケーションの道具であるのみでなく、思考と感情の道具でもあることを忘れてはならない。われわれが具体的な現在の世界に住みながら、過去と未来の見通しをもつこ

とができ、仮設的な見通しをもつことができるのは、言語というシンボルの構造をもっているからである。また、美的、道德的な好悪の世界をもち、倫理的、実際的な抽象的な一般原理をもつことができるのも、言語のおかげである。ウィゴツキイ^(注1)にはじまり、ルリア^(注2)によってすすめられた一連の言語研究は、自己の方向を見出し、自己統制をする上に言語が重要な役割を果たすことを示している。われわれが空想にふけり、微妙な冗談をとばし、自分の性格や動機について自分自身をも偽わることができるのも、言語をもっているからである。私は因果的な結びつけをしようとするわけではないが、人間の発達において、図式的表現は常に話ことばよりもおかれて発達するのである。そして、われわれが、神話、芸術、哲学、科学などの形式によって、経験を再表現することができるのは、シンボルの力をかりてはじめて可能になる。われわれは、幻像体系としての言語機能をも忘れてはならない。

明らかに、われわれは言語なくして読むことを学ぶこともできない。われわれの学習の非常に多くの部分が、実際に代わる代用的な性格をもっており、印刷されたことばを通してなのである。ことばは見逃されやすいことである。印刷されたことばは、感情面の学習についても、重要な素材であり、文学を通してわれわれは人生の喜びや悲しみの感情にふれ、人間であることの悲哀と勝利を経験することができるのである。一般的にいうならば、われわれは青少年の日常生活の中で、性の事実、老年や死、金銭、異常

や暴力などの事実から彼らを保護しようとするし、同様の意味で、刺激の強い文学からも「保護」しようとする。たしかに、子どもの鼻さきを、泥くさい現実にはわざわざすりつけるようなことは、親や教師としてなすべきではないであろう。しかし、このような墮落的な勢力が、われわれの子どもたちの教育のまわりにあることも、私どもは甘んじて受けとり、これに対処することができるであろう。

上に述べたことから明らかなように、言語はわれわれを知的にする。それは知能テストがよくできるというような狭い意味ではなく、新しい経験に目が開けるとか、深く多様な感情を経験し、推理力や判断力を働かせ、相手の気持を知り、見通しをもち、信念や信仰をもち、証拠を尊重し、内容のない表面的なことばや、ことばの魔術に抵抗し、その他、すぐれた人と一般人とを区別するようなあらゆる知的能力についていっているのである。私はここで、ハント^(注3)やファウラー^(注4)の説を支持したい。すなわち、知的個人差は、その多くの部分が初期経験の差によって生じたものである。そしてとくに、感情的同一化の力と、認知能力のよい見本が発達の初期に与えられていることが重要である。

もしも、知能は子どもものシンボル機能から発達するとするならば、親や教師にそれを養うようにせねばならない。しかしわれわれは、一生物体である人間が、どのようにして意識をもつようになり、自己統制、自己犠牲、利他主義、愛や憎、奇智やユーモア

および創造的で想像的な記号化が可能になるのかということについてはまだわかっていない。その故に、このような人間的特性は、たんに形而上的な虚構の産物にすぎないとして、顧みず、明白にわかっている体系の中で押し進めることのできることのみが有益なものだと考えてしまう傾向がある。だが、両親や教育者として、私どもは最高の人間性はどういうものであるかを心にとめて、多くの子どもたちがそこに到達するような条件を備えるために努力せねばならない。そして、人間の行動と発達の科学にたずさわる者として、われわれは謙虚になり、まだわかっていない多くの曖昧なことがらについて寛容にならなければならないのである。

注1 L. S. Vygotskii: *Thought and Language* (New York: John Wiley & Sons, Inc., 1962)

注2 A. R. Luria: *The Role of Speech in the Regulation of Normal and Abnormal Behavior* (New York: Livergh, 1961)

注3 J. McV. Hunt: *Intelligence and Experience* (New York: Ronald Press Co., 1961)

注4 William Fowler: "Cognitive Learning in Infancy and Early Childhood," *Psychological Bulletin*, 1962, Vol. 59

ナースリースクールや幼稚園の教師は、ときによって、子どもに不当な圧力を加えている。絵画製作や音楽経験は、自己表現の

媒介物であることを教師が認め、子どもたちが集団の中で芸術材料を創造的に用い、音楽を感情表現の素材として用いる自由を与えるのでなければ、それは圧力のもととなりうるのである。

絵画製作や音楽において、でき上がりが完全であることを期待することの危険性については、すでに多くのことが書かれているが、それにもかかわらず、ある教師は子どもたちの創造性の芽をつんでしまうようなことをつづけている。ある州の幼稚園の研究では、このようなことが行なわれている多くの場合について報告している。ぬりえを与えること、線のとおりに切ったり貼ったりする型紙、教師が本を作ってみせること、線の中をきちんとぬるような指示、きまった振付の遊戯を強調すること、高度に組織化された楽隊、子どもに歌を教えることを強調することなどは、子どもの創造性が阻止されていることを示す実例である。その他の州のいろいろな研究でも、このようなことが実際に行なわれていることを報告している。ある研究では、幼稚園で、あまりに多く「見せるため」のことで、製作品のでき上がりについて強調しすぎていることを報告している。芸術や音楽が、特定の技能を発達させるために教えられていて、個人の発達ということが顧みられていないのである。——メアリー・A・V・レイフィールド「おとなの自己満足と便宜のために子どもを利用すること」子供の教育、一九六〇年十一月号、一一四—一一五頁

(お茶の水女子大学・津守 真訳)